

# 「オネエ所長の調査ファイル」 # 3 5

山崎浩治

「物の怪の仮装なんかしてどうした？ 今日はまだハロウィーンじゃないぞ」

「オネエにとっては毎日がハロウィーンなの！ って、なんでやねん！ これは物の怪の仮装ちゃうわ！ 絶賛女装中や！」

「おっさん、ノリツッコミの腕を上げたな。いっそ、オカマバーのママに転職したらどうだ？」

「それはダメ。こんなあたしでもオカマを掘られるのが怖くて仕方がない時があるから」

「そ、そうなのか？ 衝撃の発言だな」

「あたしって負けが込んだ時、次の人が大当たりを出すかと思うと、やめられなくて傷を大きくしちゃうのよ～」

「それはパチンコの話だろ！」

「金沢プライベート・リサーチ」のオネエ所長、市山とツンデレ調査員の沙織が金沢市郊外で聞き込み中だ。この日の市山は三つ編みのカツラにリボン、手にはかごバッグを提げ、ギンガムドレスで女装している。本人は「オズの魔法使い」の主人公ドロシーになりきっているつもりらしい。

今回の依頼人は、金沢市の大手企業に勤める大河(25歳)である。「生き別れた母を探してほしい」との依頼を受けて調査をしているのだ。大河の両親は20年前に離婚、当時5歳だった彼は父に引き取られて育った。事前の聞き取りで大河はこう語っている。

「親父は離婚の理由をいまも教えてくれません。ぼくが覚えているのは5歳の誕生日、おふくろが家を出て行ったことだけです。それから、おふくろとは会っていません。写真が一枚も残っていないので、顔も思い出せないんですよ」

息子と20年連絡を絶っているのは、離婚に際して相当の確執があったからだろう、と市山が推測した。その大河がこの秋、結婚するという。「できれば、おふくろにも結婚式に出席してほしい」。それが依頼の真意だった。

◇ ◇

大河の母・美鶴(49歳)は金沢市郊外にある実家で母と暮らしながら、近所のスーパーで品出し係として働いていた。市山が「金沢プライベート・リサーチ」に大河を呼んで調査結果を報告している。

「お父様とは職場結婚よ。大学で経済学を学んだお母様は仕事を続けたかったらしいけど、お父様のたつての要望で家庭に入り、それからほどなくあなたが生まれた」

「離婚の理由は何だったんです？」

それは大河の心の中で長年くすぶり続けた疑問だった。

「あなたのおじい様はギャンブル狂だったのよ。お父様は子どものころ、そのことで苦労しているお母様をずっと目の当たりにしてきた」

「ちょっと待って。ぼくは祖父のことを調べてほしいと依頼した覚えはないけど……」

市山が大河を手で制して続けた。

「お母様に会ってきたわ。あなたが大学を卒業して就職したことも、近々結婚することもご存じだった。あなたのSNSをチェックしてたのよ」

「それなら会いに来てくれればよかったのに」

「『二度とあなたに会わない』。お母様はそう約束して離婚したの」

当惑の表情を浮かべた大河に、市山が言った。

「お母様もまた、ギャンブル依存症だった。お父様はギャンブル依存症の血があなたに遺伝することを恐れたのね」

言葉を失って固まった大河に、市山が語りかけた。

「お母様はいまもひどく後悔してたわ。昔、ギャンブルで負けると、まだ幼かったあなたにずいぶん手を上げたって。ギャンブルをするお金ほしさに、あなたが大切にしていた貯金箱のお金に手をつけたことさえあったそうよ。覚えてる？」

◇ ◇

幼稚園のママ友に誘われて初めて行った店内は耳をつんざくような音と、まばゆい光であふれていた。タバコの匂いも強烈で、「こんな場所には5分もいられない」と思ったものの、大当たりが出た瞬間、頭が真っ白になった。

その日、勝ったのは5万円である。あんなに嬉しかったのは結婚してから初めてのことだった。いまから思えばビギナーズラックだと分かるが、その快感が忘れられずに翌日から一人で足繁く通うようになる。服にタバコの匂いがつかないように店に行く時はジャージに着替え、服や髪についたタバコの匂いを隠すために香水を使うようになった。

最初は1万円勝ただけで大喜びしていたものの、やがて数万円負けても平気になった。5万円勝った時のことを思い出し、「勝って取り返せばいい」と考えたからだ。しかも負けが続いたら続いたで、「確率的に次は絶対に勝つ」気がして、ますますやめられなくなるのだった。

一度始めると財布が空になるまでやめられない。資金は会社員時代に作った銀行のカードローンから捻出していたが、それが限度いっぱいになると、生活用として渡されていた夫名義のカードのキャッシングやサラ金にも手をつけた。借金があっという間に200万円に膨らんだころ、夫にカードの明細書を見られて借金とギャンブル通いが発覚する。

美鶴の実家に借金を一括返済してもらい、「二度とギャンブルはしない」と誓約書を書いて一件落ち着いたものの、約束を守ったのはほんの数カ月だった。ちょうどそのころ、美鶴の父が交通事故で亡くなり、葬式を終えたその足で香典をくすねて久しぶりに店に赴く。霊柩車を見るとゲンがいい。そんなジンクスを信じていたのだ。後は坂道を転げ落ちるように元の生活に戻った。

再び夫に知られたのは、大河の5歳の誕生日である。その日、1時間だけのつもりで始めたところ、大当たりが出てやめられなくなったのだ。夜遅く上機嫌で家に帰ると、目を吊り上げた夫が待っていた。美鶴の留守中に家捜しされ、カードで借金を重ねていることも明るみに出た。夫が押し殺した声で告げた。

「ギャンブル狂いは死ぬまで治らない。オレの親父がそうだった。この家から出て行け。二度と顔を見せるな」

その時、美鶴は「これで誰に気兼ねすることなくギャンブルを楽しめる」と思った。

◇ ◇

「ギャンブルそのものが悪いわけじゃない。あたしだって気分転換でよくやるわ。それぞれが自分の生活レベルに合わせて遊べば、なんの問題もない。だけどあなたにはそれができなかったのね」

ある日の昼下がり、「金沢プライベート・リサーチ」を訪れた美鶴に市山が言った。大河のメッセージを伝えるために市山が呼んだのである。美鶴は線の細い女性で、その手首にはリストカットの古い傷跡があった。美鶴が重い口を開く。

「離婚した後もギャンブルにのめり込んで借金を作り、亡くなった父の保険金で返済する生活を続けていました。でも、そのお金もとうとう底がついて……」

資金を稼ごうと風俗で働くことを決意した美鶴が面接に赴く。すると、担当者がにべなくこう言ったという。

「あんたじゃ無理だよ」

家に帰って鏡を見ると、そこには何日も着続けたジャージにボサボサ髪とノーメイクの顔、こけた頬に落ちくぼんだ目の浮浪者のような自分がいた。

「その時、私は病気だとやっと気付きました。でも、病気なら治せるはず。それから精神科に通院し始めたんです」

ギャンブル資金を調達できないようにカードを処分し、サラ金会社にはブラックリストに載せてほしいと自分から申請した。いまでも金の管理はすべて母に委ねているという。

「毎朝、母から500円の小遣いをもらってパートに行くんです。お金を持つと、またギャンブルに使ってしまいそうだから」

スーパーのバックヤードで働いているのは、金に触れる仕事が怖いからだ。胸にため込んでいたものを絞り出すように美鶴が続けた。

「もう10年以上、ギャンブルをやっていません。やっていたころは朝起きると、どうやってお金を作るか、どんなウソを吐いて借金するか、そればかりを考えていました」

「でも、いまはウソを吐く必要なんてない。いい人生勉強をしたと思うことね」

「授業料は高過ぎましたけど。お金に家族、友達、信用……私はすべてを無くしてしまいましたから」

「息子さんから伝言よ。あなたにぜひ結婚式に出席してほしい、って」

驚きで目を見開いた美鶴に、市山が穏やかな口調で語りかけた。

「子どもはいつだって親に寛大。彼、昔のことは何も覚えていないそうよ。息子さんに会って謝りなさい。どんなに仲違いしたって謝れば、次の瞬間には笑顔で仲直りできるのが親子なんだから」

美鶴が嗚咽まじりに言った。

「大河は小さい時から怖がり、夜中、トイレに行く時はいつも一緒でした。トイレの個室から『ママ、そこにおってね』と何度も言うあの子の声をいまでもはっきり覚えています。どうして私はその幸せを手放してしまったのか。息子に会いたい。孫ができたら一緒に遊びたい。でも……」

◇ ◇

美鶴は結局、大河の結婚式に出席しなかった。「いまさら別れた夫と会わせる顔がない」というのが、その理由だった。しかし結婚式当日、色鮮やかなたくさんのフラワーシャワーを浴びながら、チャペルの階段を降りてくる大河と花嫁を敷地外から見つめる美鶴の姿があった。

「おふくろが結婚式に来てたような気がするんですよ」

それからしばらくして、新婚旅行から帰ったという大河から市山にそんな電話があった。

「お母様を見たの？」

「いえ、結婚式場でおふくろの香水を嗅いだ気がするんです。昔、おふくろがよくつけていた香水でした。ぼくにとってはそれがおふくろの匂いなんです」

電話の向こうから母の記憶を懐かしむ気配が伝わってきた。

「おふくろに伝えて下さい。気が向いたら、いつでも会いに来て、と」

数カ月後、市山と沙織が美鶴のいるスーパーに赴く。この日の市山は、赤のジャケットにタンクトップとミニスカート、膝上まであるロングブーツ姿である。映画「プリティウーマン」のジュリア・ロバーツになりきっているつもりらしい。

「今日も絶賛ハロウィーン中か、おっさん。そんな格好で歩いてたら、子どもにお菓子ねだられるぞ」

いつもの憎まれ口を叩く沙織に、市山が答えた。

「分かちやいるけど、やめられない。その気持ち、あたしにも分かるわ」

「何だよ、それ」

「スーダラ節。女装もギャンブルに似ているところがあるのかしらね」

その時、仕事を終えた美鶴がスーパーの裏口から出てきた。尾行を開始しながら沙織がつぶやく。

「あんなにまじめそうな人がギャンブルにハマっていたなんて信じられないな」

「『星の王子様』にお酒を飲んでばかりいる `呑み助、というキャラが登場するの。星の王子様から、お酒を飲む理由を聞かれた彼はこう答えている。『忘れたいから』。あたしの女装も同じ。彼女もそうだったのかもしれないわね」

家に帰る途中、なぜか遠回りした美鶴がパチンコ店の前で立ち止まった。店内から聞こえる喧噪に耳を澄ませているようだ。市山がため息とともに言葉を漏らす。

「ギャンブル依存症は進行性の病気よ。進行を抑えることはできるし回復もするけど、完治はしない。彼女はいま、心のなかで誘惑と戦っている」

「店に入るのを止めなくていいのか、おっさん」

「24時間誰かが監視することはできないわ。自分で打ち勝たなきゃ」

美鶴がいつまでも店の前で立ち尽くしていた。